とある最低とフレイムヘイズ

通行人A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある最低とフレイムへイズ

【Ｎコード】
Ｎ７５１４Ｘ

【作者名】
通行人Ａ

【あらすじ】
球磨川さんが、灼眼のシャナの世界に行って、色々やらかすというものです。

球磨川禊の消失（前書き）

駄文ですがよろしくお願いします！
後、球磨川さんの能力は作者の解釈で行いますのでご了承願います。
それでは本文をどうぞ！

球磨川禊の消失

『う～ん。困ったなぁ』

『どうしてこんなＲＰＧの世界みたいなところにいるんだろう？』

彼は困ったように言う。
見た目は何の個性もなさそうな普通の少年。
そして、世界最低の過負荷（マイナス）を所持する者。

少年の名を、球磨川禊と言う。

彼の存在は、この世界において何をもたらすのだろうか。

フレイムヘイズと過負荷（マイナス）が交差するとき、物語は始まる。

〜とある学校の教室内にて〜

『あ〜あ。退屈だなあ。学校つぶしも飽きちゃった』

一人そう呟く少年の手には大きな螺子が握られている。彼の周囲の人間達は、皆螺子をねじ込まれていた。

『何か面白い事が起こらないかなあ？』

『何か起きるとしたら、少年漫画チック的なことがいいな！』

『そうだね。例えば別の世界に行って悪と戦う！こんなのどうかな？』

そんな彼の問いかけに返答するものは誰一人としていない。

『う〜ん。……そうだ！』

『窓の外を見て消したくなったものを適当に消しちゃうってのはどうかな？』

普通に考えたらそんなことはできないと思うだろう。だが、彼…球磨川禊はそれができる。

彼の過負荷「大嘘憑き」を使えば。この過負荷はあらゆる事象を虚構にできる。その力は何も生み出さない。できる事は消す事だけ。だから何の役にも立たない負（マイナス）。

『でも、僕の暇潰し程度にはなるよねっ！』

無邪気に笑いながら窓から外の景色を眺める球磨川。

さあ、何を消そうか。
できれば人がたくさん迷惑を被る所が良いなあ。等と無邪気な顔で邪気満載なことを考えながら

『……何だこれ？』

自身の足元にある黒い穴に気づいた。
球磨川は驚きを隠せない。こんな現象は初めてみるからだ。
黒い穴は瞬く間に広がると、彼を飲み込んだ。
あまりにもあっけなく。
少年はそこから消えた。

「『僕は悪くない』」（前書き）

球磨川さんのキャラは最高ですよね！！

本文をどうぞ！

「『**僕は悪くない**』」

「『う、う～ん。ここは………？』」

気がつくと、どこかの森の中に一人ポツンと立っていた。

「『一体此処はどこなんだろう？』」

球磨川は辺りを見渡しながら森の中を歩き始める。

すると……

ガサガサ…

「『ん？』」

突然近くの草むらがざわめき始めた。

球磨川がそちらへ視線を向けると、昔の騎士のような鎧をきた変な怪物？のようなものが数十人程度出てきた。

「あん？なんだコイツは？人間か。ハハッ、ちょうどいい。食事させてもらうとするか！」

そいつらのリーダーらしき男？はそう言うと、剣を取り出した。

「『おいおい…』『早速トラブルかい？』『人気者はつらいぜ』」

球磨川がそう言うと同時に、目の前の男が剣を振り下ろしてきた。

「『おっと』」

球磨川はそれを軽々とかわすと男達に視線を向けた。

「『まったく。いきなり攻撃してくるなんて、何て悪いんだ君たちは』」

そう言うと、球磨川はどこからか巨大な螺子を取り出す。

「『そんな悪い君達は、僕が螺子ふせてあげるよ』」

同時刻。

森の中を高速で駆け抜けている二人の女性の姿があった。

一人は燃えるような紅い髪をした女性。紅世真正の魔神、天壌の劫

火アラストールのフレイムヘイズ『炎髪灼眼の討ち手』マティルダ・サントメール。

もう一人は貴婦人が着るようなドレスを着た女性、夢弦の冠帯ティアマトーのフレイムヘイズ『万丈の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメル。

二人は先ほど紅世の徒が出現した気配を感じてその現場へと向っている最中なのだ。

「徒の気配はこっちよね？」

マティルダは隣にいるヴィルヘルミナに向って問いかける。

「はい。でも、徒の反応がどんどんと消えているのであります」

「摩訶不思議」

マティルダの問いにヴィルヘルミナは確認しながら答える。

「それに、人の気配もする。同業者ってわけでもなさそうだけど…」

「とりあえず行ってみれば分かるのであります。」

「現場急行」

二人は消えていく徒の気配を気にしながらその場へと向った。

「なに……これ」

「これは…一体」

それからしばらくして二人は現場へとたどり着いた。
だが、そこにあったのは
巨大な螺子に貫かれた地面や木だった。
そしてあらゆるところに徒たちの火の粉が漂っている。
大量にいた徒たちは皆、何者かによって討滅されていた。

「一体誰が…」

「『いやーこれは酷いよね』」

「「ッ!?」」

突然響いてきた声に二人は身構え、視線をそちらに向けた。そこには、黒い服をきた少年が立っていた。

「『訳の分からない怪物たちが相手だとは言え螺子で滅多ざしとは惨い人もいるんだね』『一体誰が面白半分でこんな状況を作り出したのかは分からないけど』『おっと、勘違いしないでくれ』『僕が来たときにはこうなってたんだ』『だから…』」

少年はそこで言葉を一旦区切り……

「『僕は悪くない』」

片手に螺子を持った少年、球磨川禊は二人に向ってそう言い放った。

「「ッ！！？」」

そんな球磨川を目の当たりにしたマティルダとヴィルヘルミナの胸にはある感情が芽生えた。

それは、『嫌悪感』。

球磨川の姿を見た瞬間、彼が敵であろうとも、味方であろうとも、彼が何者であろうとも……どんな形であれ、『関わりたくない』

と思ってしまった。

だが、そういうわけにも行かないので、そんな感情を押し殺して球磨川に話しかけた。

「えっと…君は？」

「『僕？』『僕の名前は球磨川禊だよ』」

「ここで何をしていたのでありますか？」

「『うんうん、そうそうそれそれ！』『聞いてよお姉さん』『僕今とっても困ってるんだ』『実は僕気がついたらこの森の中にいてさ』『此処がどこか分からないまま歩いてたんだけど』『よかったら此処がどこか教えてくれない？』」

球磨川の言葉に嫌悪感を感じながらもヴィルヘルミナは平常心を保ちながら答えた。

「此処はオストローデ付近の森でありますが…」

「『オストローデ？』『へぇ～聞いた事ないな』」

「オストローデを知らない？まあ無理もないか。今はもうないしね……」

「『ま、別にどこだろうとかまわないけどね』『ところでせっかく僕が名乗ったんだから君達の名前も聞かせてよ』」

「あ、うんそうね。私は天壌の劫火アラストールのフレイムヘイズ『炎髪灼眼の討ち手』マティルダ・サントメール。」

「私は、紅世の王、夢弦の冠帯ティアマトーのフレイムヘイズ『万丈の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメルであります」

球磨川に催促され、討ち手としての称号と名前を名乗るマティルダとヴィルヘルミナ。すると球磨川は首を傾げる。

「『フレイムヘイズ？』『紅世の王？』『何それ？』」

「知らないの？てっきり知ってるかと思ったけど」

「まあそれについては後で説明すればいいのであります。とりあえず、貴方には聞きたい事がいくつかありますので私達と同行してもらうのであります」

「『え～それはちょっとイヤだなあ』『と言いたい所だけど』『君たちみたいな綺麗な人に連れて行かれるなら別に良いかな？』」

そういって球磨川は同行を受け入れたのであった。

「『甘ぇよ」』（前書き）

球磨川さんって結構名言多いですよねー！

では本文をどうぞ！

「『甘ぇよ』」

森の中でマティルダ・サントメールとヴィルヘルミナ・カルメルに出会った球磨川は様々な事を聞かされていた。

人の存在を喰らう歩いていけない隣の世界からきた住人、紅世の徒。

存在の力の乱獲によって引き起こされるであろうといわれている大災厄。

それを阻止し、世界のバランスを保つ為に作られた紅世の王が入った存在、フレイムヘイズ。

存在の力を使って使用する自在法。

『都喰らい』という自在法を使い、空前のゆがみをもたらした紅世の王・棺の織り手アシズ。

その彼が率いる徒の集団・『とむらいの鐘』

それに対抗するために組織されたフレイムヘイズ兵団。

彼女達は気がつかなかったが、その説明を聞いた後の球磨川の顔は、とてつもないほどに歪んだ笑みに満ち溢れていた。

そんなこんなで、なにやらテントのようなものが集まった場所に連れてこられた球磨川。

「『へ～え。すごいや！』『まるでＲＰＧの世界だね！』」

と、球磨川はやや興奮気味に歩いている。

そんな球磨川をマティルダは「静かにして」と注意すると、あるテントの中に足を踏み入れた。

その部屋の中には修道服を身に纏った女性が椅子に座っていた。

「あら。もう帰ってきたんですね。で、そこにいるのが貴方が報告のあった人なんですか？」

そう言うと、女性は球磨川へと視線を向けた。

「うん。球磨川くん、自己紹介してくれるかしら？」

「『はーい♪』」

そう言って球磨川は一歩前に出る。

「『どーも初めまして』『この度こちらに保護された球磨川禊でーす！』『好きなものは少年漫画です』『よろしくお願いします！』」

「あ、はい。初めまして。私はゾフィー・サバリッシュ。一応フレイムヘイズ兵団の総大将をしております（少年漫画…？）」

「『へーあなたがここの大将さんなんだ！』」

「それよりも、なぜ貴方の様な普通の人間がこのような場所に？」

「『それが分からないんですよねー』『黒い穴？みたいなものに吸い込まれて』『気がついたら此処にいたんですよ』」

「それは一体どういうことですか？」

「『話を進める前にゾフィーさん』『催促をするようで申し訳ありませんが』『お茶をください』『今すぐに』」

ゾフィーが球磨川の言葉の意味を確かめようとするが、次に球磨川が放った言葉でそれは遮られた。

「『何分彼女達に会ってここに来るまでに』『随分と森の中を歩き回ったんで』『のど』『渇いてしまいまして』」

「…そうですね。ごめんなさいね気が利かないで。ドゥニ、紅茶をお願い」

「は、はあ」

傍らにいたゾフィーの副官ドゥニは気の抜けた返事をして、紅茶を入れに行った。
その間、ゾフィーは自分の目の前にいる球磨川をジッと見ていた。

「（球磨川くん……不思議な人ですね。おちゃらけているように見えて、その実…まったく私達に話の主導権を握らせようとしない。それに、数十もの徒を討滅したのがこの少年なのだとしたら、この少年は相当な戦力になるかもしれませんね……。それに、あの子からは徒でも、フレイムヘイズでもないまったく別の何かを感じる……）」

ゾフィーが球磨川を見ながらそう考えている間に、ドゥニは紅茶を淹れ終え、球磨川に渡していた。

「『んっ』『おいしっ』」

「さて、喉も潤ったところで、球磨川くん」

球磨川がお茶を飲んだのを見計らって話を再開させた。

「さっき言ってた、黒い穴に吸い込まれてきたと言うのはどういうことなんですか？」

「『んー？』『そのままの意味ですよ』『何度も言うとおり』『黒い穴に飲まれて、気がついたら森の中にいたんです』」

「………まあいいでしょう」

その辺は深く追求せず、ゾフィーは本題を切り出した。

「球磨川くん。私達に協力してくれませんか？」

「『？…と言うと？』」

「この世の本当のことは、マティルダから聞きましたよね？徒たちと戦うのに力を貸して欲しいんですよ。勿論、無理にとは言いません。ですが、一人でこの辺をうろつくと、徒に出会ってしまうかもしれません。もし王クラスの徒と鉢合わせてしまったら最悪…殺さ

れる事もありえます。私はそんな事になってほしくはありません。
そこで、球磨川君には兵団に所属して欲しいんです。貴方へのメリットとしては兵団に所属する事で、衣・食・住の保障はできるんだけれど……どうします？」

「『・・・・・・・・』」

ゾフィーの説明を聞いた球磨川は『ふう…』とため息をつき口を開いた。

「『やれやれ』『つまり貴方は遠まわしに』『協力しないと徒に会ったらどうなっても知らないぞって』『脅してるんだね』『人のよさそうな顔をして』『とんだ策士だよ』」

「そこまで分かるなんて球磨川君は賢いんですね。それなら、どうするべきか分かるはずですが…」

「『…そうだね』『今置かれている状況からしたら』『僕に残されている選択肢は一つしかない』」

「それならーー」

ゾフィーがうれしそうに口を開きかけたその時……

ドドドッ！！

「………え？」

一瞬、ゾフィーは何が起こったのか理解できなかった。

だが、すぐに理解した。

自分の両腕、両肩、わき腹に巨大な螺子が突き刺さっていることに……。

「ゾフィー！！」

「総大将！？」

突然の事態に呆然としていたマティルダとドゥニが叫ぶ。そんな中、彼女に螺子を突き刺した張本人…球磨川禊は笑っていた。

「『僕に残された選択肢』『それは今ここで貴方を葬る事だよ』『ゾフィーさん♪』」

「くっ……ごほっ……！！」

驚愕と苦痛に満ちた表情で血を吐くゾフィー。

「『あれれ？』『何その顔？』『女の人なら攻撃されないと思った？』『ここのボスを気取ってれば安全だと思った？』『僕が可愛らしい顔立ちだから』『おしゃべりの最中なら死なないと思った？』」

そういいながら球磨川は一本の螺子を彼女の眉間へとあて……

「『甘ぇよ』」

その螺子を渾身の蹴りで頭にねじ込んだ。

……はずだった。

「はっ!?」

「『…が』『その甘さ』『嫌いじゃないぜ』」

そう言って、ビシッと指を突き出す球磨川。が、当のゾフィーはそれどころではなかった。

「(何ですか今のは…。幻覚でも錯覚でもない。痛みも感触も本物だった。でも、体に刺さっていた螺子も、傷も、服も、血の跡さえ残っていない!?)」

ふと、マティルダたちに視線を移すが、皆困惑したような表情を見せていた。

「『まあでも』『せっかく来たんだ』『君たちに協力するのも面白いかもしれないね』」

一方、球磨川は何事もなかったように会話を進めている。

「『さてと』『ここでお話してるのも飽きたし』『外の空気でも吸いに行こうかな?』」

そう言って球磨川はテントから出ようとする。

「待ちなさい!まだ話は…「マティルダ!!」……!」

テントから出ようとする球磨川を止めようとするマティルダだが、ゾフィーの一喝で止められる。

「構いません。ですが妙な真似はしないように」

「『さっすが総大将』『話の分かる人だ』『そんな総大将』『僕』『結構好きですよ』」

そういい残して球磨川は出て行った。

出て行くのを見送ったマティルダはゾフィーに問いかけた。

「どうして？あの子には聞きたいことが「私は」……！」

彼女の言葉を遮ってゾフィーが口を開く。

「フレイムヘイズとなった後でも、いろんなところを駆け回っていろんな人を見てきました」

「でも、球磨川くんのような人は見た事がありません。今まであった人の中には、今のままで満足している人、さらに上を目指そうとしている人がほとんどでした。でもあの少年は違う。上ではなくて、下を目指している人間……！」

そこで彼女は口を一旦閉じ、再び開く。

「もしかしたら……私はとんでもない人を引き入れたかもしれませんね」

その言葉に返せるものは誰一人としていなかった。

つづく。

「『甘ぇよ」』（後書き）

話の展開に無理がありますかね…？

「『また明日とか！』」（前書き）

やりすぎたかな？

本文をどうぞ！！

「『**また明日とか！**』」

テントから出た球磨川は、特にやる事もないのでその辺をぶらぶら歩いていた。

「おい。お前が球磨川禊か？」

背後から声をかけられ、球磨川は振り向いた。
そこには、体格のいい甲冑を着た青年が立っていた。

「『？僕なんかに何の用かな？』」

「俺はカール・ベルワルドってんだ。ちょっと付き合ってくれよ。ゾフィーの大将が認めたお前の実力を見てみたいんだ。いいだろ？」

突然の闘いの申し込み。
球磨川はいつもどおりのあざとくも人のよさそうな笑顔で

「『うん』『いいよ』」

と答えた。

結論から言おう。

カールは球磨川を圧倒していた。当然といえば当然である。数多のフレイムへイズの中でも1、2を争う強さを持っているのだから。

「おいおい。そんな螺子を振り回しても俺には勝てんぞ？」

球磨川は螺子を振り回す。

カールが、ゾリャーで彼の体を引き裂く。

球磨川は螺子を投げつける。

しかし、カールはそれを避けると、カウンターの一撃を入れる。

攻撃をしては回避され、一撃を叩き込まれる。

腕に、肩に、足に、膝に。

これでもカールはまだ手加減していた。何せ、唯の人間である。致命傷を負わない程度にはしていた。

「『…………』」

それでも球磨川は懸命に螺子を振り回す。

その表情からカールはある種の不気味さを感じ取っていた。

体を切られ、打ち付けられても、それでも彼はーーーーー

彼は笑っていた。

「『まったく』『こんなに僕をボコボコにするなんて』『週間少年ジャンプじゃ規制されかねない描写だよ』」

球磨川はそう言うと、よろよろと立ち上がる。

「『さてと』『そろそろ僕も』『少しだけ本気出そうかな？』」

球磨川がそういったとき、カールは何か違和感を感じた。まるで、空間が捻じ曲がるような感覚。

「（まずい！何かくる！）」

そう考えて彼は球磨川と距離をとる。

しかし……。

「なっ！！」

確かに、ゾリャーを使い、距離をとった。それなのに…。

何でコイツが目の前にいるんだ？
しかも、あれだけあった傷が、全て治っている。
「くそっ！治癒と転移の自在法かッ！？」
驚くカールをよそに、球磨川は
「『そんなに驚かなくてもいいよ』『君が僕と距離をとったという現実を』『無かった事にしただけなんだから』」
「『それに』『治癒だなんていう【利点のある能力】が』『この僕にあるわけないじゃないか』」
冗談はやめてくれといわんばかりに首を振る球磨川。
カールは目の前で起きている不可解な現象に思わず目眩を催した。
「お、お前は…」
消え入るような声で、すがるような声で。

「一体、何なんだ!?」

懇願するように、問うた。

「『知っているだろう?』『僕は球磨川禊。ただの過負荷の人間だよ』」

そう言って、どこまでもマイナスな螺子を、彼の体にねじ込んだ。

否、ねじ込もうとした。

「何をしているんですか!」

声が聞こえ、見るとそこにはゾフィー達がいた。

「『何って』『僕はカールさんと遊んでいただけですよ?』」

球磨川は悪びれもせずそう言い放つ。

「騒ぎは起こさないって約束だったでしょう、球磨川君!」

「『そうでしたっけ?』『いやー僕最近忘れっぽいんだ』『それに勘違いしないでほしいな』『今回の原因はカールさんなんだから』『まあでも』『約束を破っちゃったのは事実だし?』『じゃあこれ

でおあいこってことで』」

そう言うと、球磨川は手に持っていた螺子を自分の頭に突き刺した。

ブシュッと言う音がして真っ赤な鮮血が滴り落ちる。

皆、愕然として球磨川を見るが

「『それじゃあ』『また明日とか。』」

それだけ言うと球磨川はどこかへと去っていった。

～マティルダＳＩＤＥ～

気持ち悪い。
それがあの少年……球磨川禊を見たときの感想だった。まるで人間の負という負の感情を固めてできたような存在。

「ねぇ、アラストール」

『なんだマティルダ』

「あの球磨川って子、どう思う？」

『……正直我にもあの者の考えている事が良く分からん。だがこれだけは言える。あの者は危険だ。』

「そうね…でも今は【とむらいの鐘】との戦いに集中しないと……」

もうすぐ大戦が終結する。

彼の元へ向わないと……。

今度の戦いできっと終わる。そんな気がする。

彼女にも、随分つらい思いをさせちゃったしね………。

すべてを消し去る事で、何かを変えられるかもしれない。

～マティルダＳＩＤＥ終了～

その頃、球磨川はまたも別のフレイムヘイズと会話をしていた。

「『ねぇねぇ』『どうして君は体中傷だらけなんだい？』『確かフレイムヘイズは傷跡とかは残らないって』『マティルダさんたちに聞いたんだけど』」

問いかけられた少年……儀装の狩り手カムシン・ネブハーウは表情をあまり変えずに

「ああ、あなたがあの球磨川君ですか。この傷のことなら気にならないでください。これは……人との思い出のようなものですから」

と答えた。

最後の方にだけ僅かに感情の入り混じった感があった。無論、それを球磨川が聞き漏らすはずもない。

「『ふ〜ん』『人との思い出かあ』『でもごめんね』『その傷』『もう戻しちゃった』」

「ッ！！？」

球磨川がそういった途端、カムシンは何か違和感を感じた。
そう、体にあった傷が全てなくなっているのである。
「『ごめーん』『思い入れとか』『心がけとか』『誓いとか』『僕、そういうのよく分からないんだー』」
満面の笑みを浮かべながら楽しそうに言う球磨川。
「『んじゃ』『また明日とか！』」
そう言って球磨川は何処へと去っていった。

つづく？

始まった大戦（前書き）

更新大幅に遅れて申し訳ありません。

それでは本文をどうぞ！！

始まった大戦

「『やれやれ』『すごいや』『こんなの週間少年ジャンプでもないよ』」

様々な色の炎や自在法がとびかう戦場から遠く離れたフレイムヘイズ兵団の本陣で一人そう呟く球磨川。
大戦の最終決戦が始まったのだ。

「あーららら。うちの右翼が滅茶苦茶に」
『呑気に感想をはかれてもらっては困る。君が総大将なんですぞ？』
「分かっていますよ、タケミカズチ氏」
崖の上から戦場を見渡すゾフィー・サバリッシュはため息をつく。
「（今回ばかりはこの戦に負けるわけには行かない………やるしかありませんね）」
ゾフィーはそう思いながら本陣へと戻り、
「私が出ます」

思わぬ言葉に天幕の内で地図を睨んでいた数名から動揺の声が上がった。

『なんと。総大将自らの太刀打ちとは。愚作のきわみですぞ？』

言われた彼女はしかし、天幕のうちに向き直り、噛んで含めるように言う。

「迅速に階層寸前の右翼に駆けつける。新米たちを脅しつけてその場に踏みとどませる。ウルリクムミを食い止めて陣列を立て直すための時間を稼ぐ。今、これらを全部で同時にできるフレイムヘイズは私だけです。反論は？」

タケミカズチを含め誰も口を開かなかった。

「よろしい」

『では参りましょうか、震威の結い手ゾフィー・サバリッシュ君？』

「はいはい参りましょう。払の雷剣タケミカズチ氏」

そして紫電を纏わせながら彼女は飛び立ち、

「だあらっしゃあああああーーーー！！」

ドロップキックを派手に喰らった戦場にいる鉄の巨人が宙を待った。

「『あ～あ』『暇だなあ』『少年ジャンプもここにはないし』」

球磨川はそう言いつつも、この戦いに興味津津であった。異常(アブノーマル)でも過負荷(マイナス)でもないまったく別の法則に出会えたことに彼は素直に喜んでいた。そして、その法則が、彼からみてプラスな能力であったという事も。

「『これでこそ螺子伏せ甲斐があるってもんだよ』『こんな利点に満ち溢れた能力(プラス)をもった強者(エリート)をマイナスにする機会なんてまたとないだろうしね』」

彼がもといた世界で掲げていたエリート抹殺計画。それは何も人間だけに適用されるものではない。例え異世界の住人だろうと、動物であろうと、昆虫であろうと、ロボットであろうと、優秀でさえあれば抹殺対象。

例外なんてものは存在しないのだ。

そして。

球磨川の視線はある場所へ集中していた。

そこは、ブロッケン城砦。

紅世の徒の大集団、とむらいの鐘（トーテングロッケ）の幹部九尅天秤がいる敵の本拠地。

そこを見つめる球磨川の顔は、歪んだ笑みに満ち溢れていた。

その頃。

ブロッケン城砦では二人のフレイムヘイズと、二人の徒が対峙していた。

炎髪灼眼の討ち手・マティルダ＝サントメール。

万丈の仕手・ヴィルヘルミナ＝カルメル

そして九劾天秤が両翼である紅世の王・虹の翼メリヒムと甲鉄竜イルヤンカ。

一大決戦が始まろうとしていた。

そんな緊迫した状況に。

球磨川禊は躊躇なく介入する。

「『おいおい！』『君たち何をしようとしてるんだい？』『暴力はいけないいよ！』」

「『ああ』『自己紹介がまだだったね』『僕の名前は……』」

そこまで言ったとき、突如飛んできた虹の線によって彼の身体は消しとばされた。

続く。

次回予告

「『ええ』『ですから』『君のその中二病くさい虹の線に込められていた存在の力を』『無かった事にしました』」

―――――――――人類最低最弱の過負荷（マイナス）・球磨川禊

「『これじゃあホントにファンタジーだね』」（前書き）

２０１１年もあと僅かです！

それでは本文をどうぞ！

「**『これじゃあホントにファンタジーだね』**」

気がつくと、球磨川は教室の中にいた。
ここは、彼が死んだときに来る場所でもある。
だが今回は、いつもならそこに居るはずの人間がいなかった。
「『あれえ？』『安心院さんがいないじゃないか』『これは一体どういうことなんだろう？』『まっ』『どうでもいいか』」
誰もいない教室で球磨川はそう言うと、教室の扉を開けて戻っていった。

〜球磨川が現れる少し前〜
空にある虹の翼メリヒムは、出会うたびに駆られる激情の中にあった。
(今日も一つ、喜びとともに積み重なる……俺を前にしたお前の姿が)
その見下ろす先に立つ女・・・炎髪灼眼の討ち手は、しかし真っ向

から睨み返して見下される事がない。
黒いマントに裾長の胴衣、ベルトには帯剣せず鎧は帷子のみ、黒い長靴にかがやく拍車という、実質本位に身を固めた出で立ちだったが、それこそが完全な姿とも思わせる圧倒的な存在感が発せられていた。

その待ち人の声を求めてメリヒムは言う。

「まさか、【天道宮】を奪取してくるとはな」

「そう？　ちょうどいいタイミングだと思うけど」
マティルダはとぼけつつ、まったく率直に戦いを始める。

「よし」

「いくわよ、アラストール」

「うむ」

遠雷のように響き渡る声が、彼女の指輪型の神器コキュートスから聞こえた。
その短いやり取りに込められた信頼以上のものにメリヒムの激情は一転して憤怒に変わる。

「────！！」

傍目にも分かる豹変振りに相棒である甲鉄竜イルヤンカは、
（まるで子供だ）と呆れる。

そして。

イルヤンカの視線の先に純白のリボンが舞い降りた。そこに立っている人物に向ってイルヤンカは言う。

「過日は世話になったたな、『寡言と戦技無双』……」

「あれだけの負傷から僅か五日、もう復調でありますか」

「頑健祝着」

万条の仕手・ヴィルヘルミナ＝カルメルと彼女に異能の力を与えている紅世の王・夢弦の冠帯ティアマトーがマティルダと背中合わせに立っていた。

「過日の約束を覚えているか？」

突然、メリヒムにそう聞かれたマティルダは一瞬何のことか分からず怪訝な顔をした。

「約束というのはあの愚かしい戯言のことか」

欠片も欲しくもない答えを受けたメリヒムは舌打ちせんばかりに顔をゆがめた。

そんな彼らを、マティルダは可愛らしく感じて、思わずクスリと笑ってしまった。

「ああ、たしか……『勝ったほうが、相手を好きにする』……だったかしら？」

「『うわあ』『それはまた大胆な約束だね！』『そこのメルヘンな顔をした君』『裸エプロンでもさせるつもりなのかい？』」

「「「ッ!?」」」

今までの緊迫した空気をぶち壊すかのごとく、球磨川が現れた。

「『へーえ！』『ドラゴンがいるなんてホントにここはファンタジーだね！』『中二病臭さがよくでてるよ』」

イルヤンカを繁々と眺めながら言う球磨川。

「『そういえば』『君たちこれから何をしようとしてたんだい？』『暴力はいけないよ』」

「『ああ』『自己紹介がまだだったね』『僕の名前は……』」

そこまで言ったとき、彼の身体はメリヒムの放った自在法・虹天剣で消し飛ばされた。

「ふん。いらん邪魔が入ったおかげで興がそがれた」

虹天剣を放ったサーベルをマティルダの元に向きなおしてイライラとした表情で言うメリヒム。

「まあともあれ、これで邪魔が入ることもない。さあ来い！マティルダ、今度こそお前を俺のものにしてやろう！」

高らかと宣言するメリヒム。

「『あ〜あ』『いきなり攻撃してくるなんて酷いじゃないか』『名前くらい言わせてくれよ』」

「！」

声が聞こえた。

その声が聞こえた所には、傷一つない球磨川が立っていた。

「貴様、何故生きている……！？」

確かに自分はあの人間を殺したはずだ。手ごたえもあった。

だが、現にあの少年は生きている。

「『え？どうして僕が生きてるかって？』『それはね……』」

球磨川の言葉を最後まで聞き終わらないうちにメリヒムは虹天剣を放った。

だが、放たれた虹天剣は球磨川に届く前に消えた。

「なッ！？」

これにはさすがのメリヒムも動揺を隠せなかった。

「『おいおい』『人の話は最後まで聞くもんだぜ？』『それでは改めて』『僕の名前は球磨川禊って言うんだ』『よろしくね！』」

「貴様……一体何をした？」

球磨川を睨みつけながら彼に問うメリヒム。

「『何も大したことはしてないよ』『唯、なかったことにしただけさ』」

「……なかったことにしただと？」

「『そうだよ』『現実（すべて）を虚構（なかったこと）にする』『それが僕の大嘘憑き（オールフィクション）だ』」

それを聞いた球磨川を除く全員が驚愕に顔を染めていた。

現実を虚構にする。

そんな自在法は聞いたこともない。

そんな物理法則を無視したような事があっていいものか。

「と、いうことは俺の虹天剣をなかったことにしたとでもいうのか？」

「『せいかーい！』『お利巧さんだね！』『とは言っても正確には』

「『虹天剣？であってる？』『とにかくそれに込められていた存在の力をなかったことにしたのさ！』」

ヘラヘラと笑いながら言う球磨川。

その途端、今度は球磨川の首が斬りおとされた。

一瞬で肉薄したメリヒムの持つサーベルで。

が。

「『痛いなあ』」

すぐに復活する。

「『いくら大嘘憑きで死なないとはいえ痛覚はあるんだよ？』『むやみやたらに殺さないで欲しいなあ』」

そういった瞬間さらに右腕が斬りおとされる。

凄まじい量の鮮血がほとばしる。

だがそれでも彼は笑みを崩すことはなく笑っていた。

「『あーあ』『なーんか目眩がしてきちゃったなー』『出血多量で

また死んじゃうかも知れないなー』『あーでも痛くなくなってきた』『死ぬ兆候かなー』『ま、どうでもいいことかぁ』」

そう言いながらゆっくりと一歩ずつ動き出す球磨川。

その姿を見て皆が一様に思った。

【気持ち悪い】、と。

球磨川からは異様なまでの気味悪さがにじみ出ていた。
全てを台無しにするような、何もかもを否定するような、人間や徒の持つ負の感情を集約したような存在感。

この場にいる全員が球磨川禊という負(マイナス)に呑まれかけていた。

次回予告

「ガヴィダからの言伝だ！！『ドナートは俺に言った！』」

――――――炎髪灼眼の討ち手・マティルダ＝サントメール

「『このままだと色々面倒くさそうなので』『ラビリントスを無かったことにしました』」

――――――――人類最低最弱の過負荷・球磨川禊

「『これじゃあホントにファンタジーだね』」（後書き）

中途半端な終わり方で申し訳ありません。
これからもうまく書いていけるように精進します。

「『大擁炉モレク？』『そんなモブキャラ知らないよ』」（前書き）

今年はマヤの予言の年。２０１２年です。

スイマセン、別にどうでもいいことですよね。

本文をどうぞ！！

「**『大擁炉モレク？』『そんなモブキャラ知らないよ』**」

～マティルダｓｉｄｅ～

球磨川禊。
今までいろんな人を見てきたけれど、あれほど劣等感と敗北感に満ち溢れた人間は見た事がない。

（あの子本当にあれでも人間？）

彼の考えている事がまったく読めない。
さっきの空気を読まない登場の仕方といいまったく？み所がない。

それにしても何だ？
全てを無かった事にする。
目の前の少年はそう言った。あんな自在法……いや違う。自在法があんな最低な雰囲気を放つものか。

（でも……今は戦いに集中しないとね）

今がチャンスだ。
メリヒムとイルヤンカの注意が球磨川君に向けられている隙にやるしかない！！

見上げた先の天壌の抜けた塔が目に入る。

そして私は大きく息を吸い叫んだ。

「ガヴィダからの言伝だ！！『ドナートは俺に言った！』」

～マティルダｓｉｄｅ終了～

「『うわっと！』
『いきなり大声で叫ぶから鼓膜が破れるかと思ったよ』」

マティルダの放った声で驚いたような顔をする球磨川。

その時。

突然全ての光景が罅割れ、ずれた。

「『うわっととと！』『今度は何なんだ？』」

足元のおぼつかない球磨川は倒れそうになる。

が。

「確保であります！」

ヴィルヘルミナがマティルダと球磨川に幾条もリボンを巻きつけた。

「ラビリントスだ！」

アラストールの声を合図としたかのように、罅割れた光景が崩れおち、混ざり合う。上下左右も分からない攪拌の中へ、またその奥へと、マティルダ達は飲み込まれていった。

「あいたたた…。これがラビリントスか。内部の空間を操る自在法ってとこかしら？」

『そのようだ。要塞丸ごとの規模とは恐れ入る』

いつのまにかマティルダ達は薄暗い石造りの廊下に尻餅をついていた。

ただ、その廊下は異様だった。奥に伸びている廊下が途中で捻じ曲がっていたり壁についている燈台の火が渦を巻いていたり。

「『う、う～ん』『あれえ？』『どこだいここは？』『確かさっきまでは外にいたはずなんだけど？』」

括弧つけた声が聞こえた。

マティルダとヴィルヘルミナは振り返り球磨川がいる事を確認する。

「『ねえねえ！』『もしかしてこれって自在法って奴なのかな？』」

球磨川は辺りを見渡しながらヴィルヘルミナに聞いた。

「ここは恐らく九亥天秤の一人、大擁炉モレクの自在法、ラビリントスの中でありましょう」

それを聞いた球磨川は

「『え、えー！！』『おいおい』『という事は今僕達はこの迷宮みたいな場所に閉じ込められたってことなのかい？』『怖いなあ』『あまりにも怖くてーーーー』」

「『螺子伏せたくなっちゃったよ』」

「ッ!?」

そう言うと球磨川はいつの間にやら手にした無数の螺子を壁に螺子込んだ。

すると。

「「はッ！？？」」

気がつくと、要塞外部の山肌にいた。

「い、いったい何が起こったの……？」

『な……んだ？』

「ラビリントスが……消えた？」

「異常事態」

二人のフレイムへイズとその契約者たちは驚愕をあらわにした。
そんな中球磨川だけがニコニコと満面の笑みで立っていた。
「球磨川君！あなた一体何をしたの！？」
マティルダが球磨川を問い詰める。
球磨川は肩をすくめると、いつもの歪んだ笑みで言った。
「『このままだと色々面倒くさそうなので』『ラビリントスをなかった事にしました』」

驚愕しているのは彼女達だけではなかった。
「おや？おかしいねえ。さっきまでは、確かに大擁炉のラビリントスがあったはずなんだが……」

三つ目の女怪が不思議そうに首をかしげ、

「う、嘘だ。うわああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

九亥天秤の一人は泣き叫び、

「何事だ!?」

「宰相殿のラビリントスが……消えた? まさか、討滅されたのか!?」

両翼は事態がわからず驚き、

「何が起こった!?」

「宰相殿が!」「悪意のない悪意のもとに!」「消え去った!」

要塞の主塔にたたずむ青い炎の紅世の王と一人だけの九亥天秤が驚き慌てた。

そして。
山肌にたたずむ三人の前に、両翼が舞い降りる。
とむらいの鐘の誇る最強の将、『虹の翼』メリヒムと『甲鉄竜』イルヤンカ。彼らは得がたき宰相を討たれ、戦意に燃えている。

メリヒムがマティルダに問うた。
「準備は、万端だな？」
それを聞いたマティルダは堂々たる笑みを崩さず受けて立つ。
「それを、私に尋ねるの？」

次回予告

「『……カルメルさんさあ』『ホントに君の気持ち』『メリヒムさんに届くと思ってるの？』」

――――――人類最低最弱の過負荷・球磨川禊

「わかってる………分かっているのであります」

――――――万条の仕手・ヴィルヘルミナ＝カルメル

「『大擁炉モレク？』『そんなモブキャラ知らないよ』」（後書き）

球磨川さんの表現の仕方が難しい。

今回も駄文でスイマセン。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7514x/

とある最低とフレイムヘイズ

2012年1月13日00時45分発行